



一緒に育ってきた
年上幼馴染と

身体寄せ合う

混浴SEX! ?

年上金髪幼馴染と
秘密♡の♡

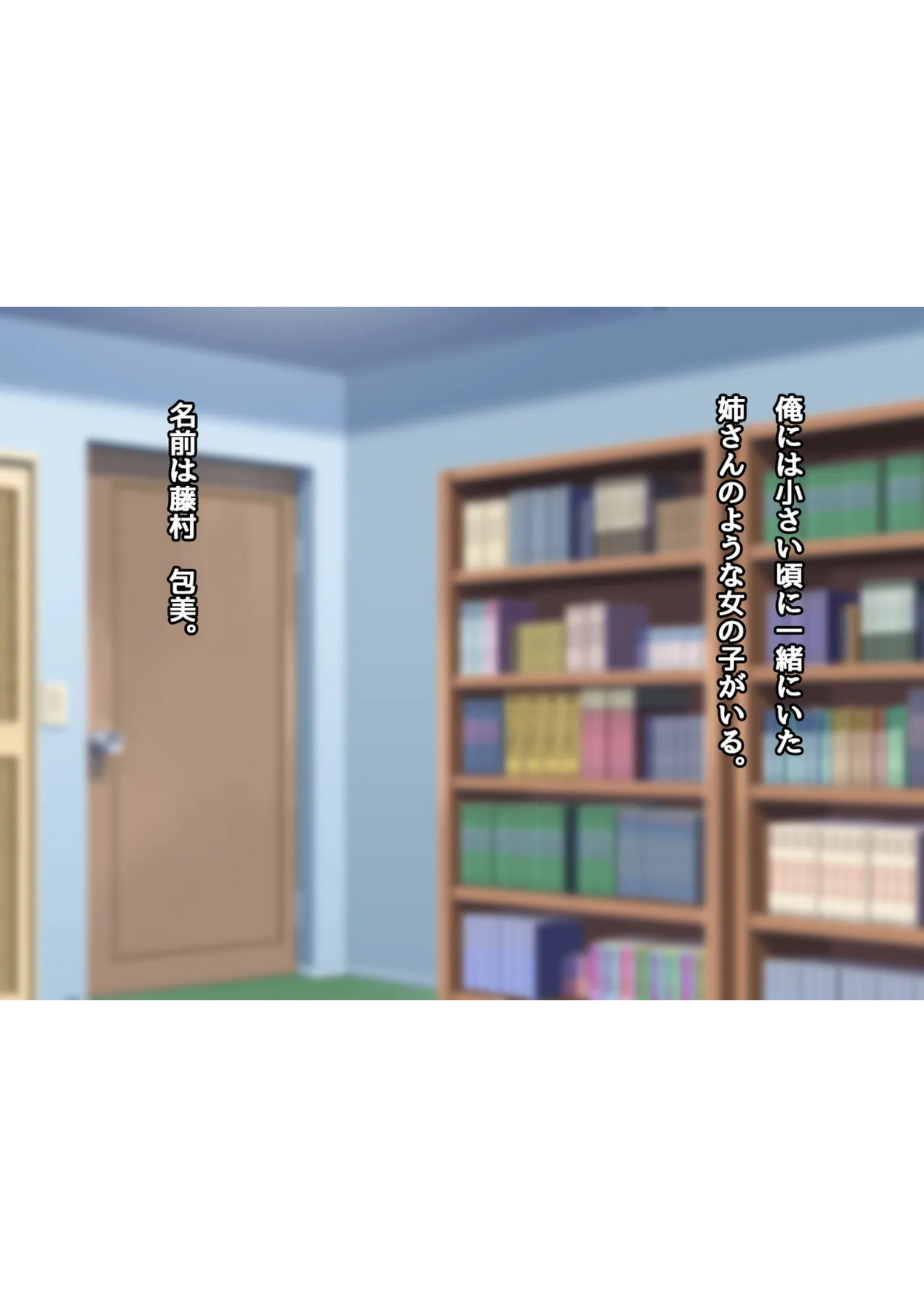
基本CG11枚
差分込 61枚
総枚数 118枚

びすけっとーん♡温泉SEX♡

「さあ、中入ろっか。」



この状況…どうすればいいんだろう…。
俺…どうなっちゃうんだ…!?

A room with light blue walls and a green carpet. On the right, there is a large wooden bookshelf filled with books of various colors. On the left, there is a brown door with a silver handle. The scene is brightly lit.

俺には小さい頃に一緒にいた
姉さんのような女の子がいる。

名前は藤村 包美。

A room with a bookshelf and a door. The bookshelf is filled with books of various colors. The door is brown and has a silver handle. The walls are light blue.

包美にはよくお世話してもらっていた。

泥んこになって帰ってきた時には

一緒に銭湯に行って体を洗ってもらったなあ。

それから十年くらい経ち、今は

俺は高校生。思春期真っ盛り。

包美は来年にはもう大学卒業くらいかな。

しばらく連絡を取っていなかったのだが、
昨日包美から会おうとメッセージが来た。

そのメッセージの内容が少し問題
なのだが…。

ピンポイント

あっ…もう来たのか。き、緊張する…。

「はあ：久しぶり〜。外めっちゃ暑いね…。」

この人が藤村 包美。久しぶりに見たけどめちやくちや可愛くなってる。



「その感じだと家でゲームばかりしてたな〜？」

あはは、変わらないね。」

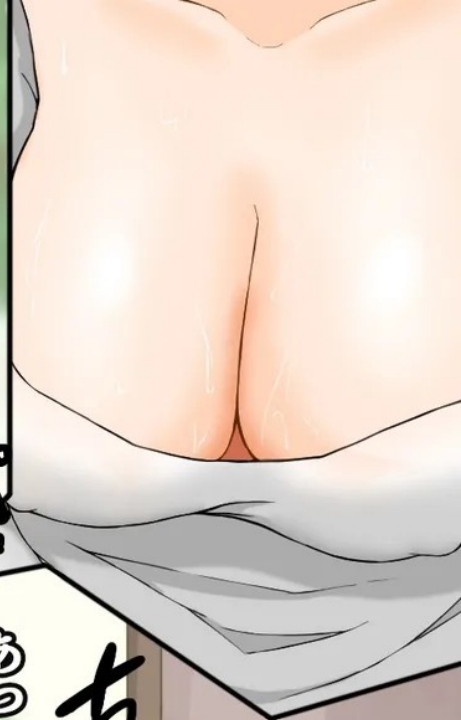
なんか…ブラしてるのか？
胸の形がえらくはっきりしてるよな…。



たっ…

あっ…み、見えそ…。

ちっ…





さ、触りたい。。。
汗でテカってるのがまた。。。

たふふ

少し見ないうちだと
こんな身体だ。。。

ちいっ

よく見たら足も。。。

むむ

って何考えてんだ俺は。。。
そういう関係じゃないだろ。

「どーしたの？暑さで頭おかしくなった？」



気づいてないようだ。。。

いや、そもそも意識してるのは
包美の所為なんだ。

「は〜♡涼しく♡生き返ったよ〜。」
あ、あのメッセージは間違いではないのか
聞かなくては…。

「な、なあ。送って来たメッセージの
ことなんだけど…。」



「あ！そうそう！久しぶりに
昔やったように外で遊びたかったんだよ〜！
付き合ってもらおうからね？」
「い、いやそっちじゃなくてその後の…。」

「早く行いっ！日が暮れちゃうよ〜」
「あっ！ちよっど…！」



手を引かれてそのまま
遊びに行くことになった。

そしてそれが猛暑の中三時間続くことになる。

「はあ〜楽しかった〜！汗めっちゃ
書いちゃったね〜♡」

っ、疲れた…。ハードだった…。
包美運動できるからなあ…。



「…どうしたの？…そんなに見られたら

恥ずかしいんだけど…」

「い、ごめん！綺麗になったなあと思って…」



「…あんなに可愛くも

何となく可愛くも

「よし、汗流して行くか。」

「冷たいシャワー浴びたいなあ。。。」

「ぞ、ぞうだな。行くかうか。」

ほ、本当に行くのか。。。人生史上一番

緊張するぞ。。。そう、これがメッセージで

あった問題の内容。。。



「わー！懐かしいなあ！何年振りかな！？」
はしゃいでる包美は可愛いけど
緊張がそれを上回る。



昔から家の近くにある銭湯。
この地域は高齢者しかいない田舎のため、
混浴しかないのだ。
つまり……

思春期真っ盛りの男とムチムチに育った
大学生お姉さんの混浴……!!
包美の身体の成長に俺の息子が反応して
ギンギンになってしまったら最後……



この関係にヒビが

「どうしたの？ 深刻な顔して。」

「い、いやなんでも……」

「そっか。さあ、中入ろっ！」
この状況…どうなっちゃうんだろう…。
俺どうなっちゃうんだ…!?



耐えるんだぞ…息子…!
お前にかかっているからな…!!

その意気込みも

一瞬で崩れ去ることを

この時の俺はまだ知らない…。

「よいしょつと…。」
御構い無しに服脱いでる…！
視線を外してなんとか
全裸は見ずに済んだ…。

とはいえ思春期男子には
刺激が強すぎる…！！

「なんか今日変だね。
久しぶりだから？」



「私もね、少しだけ緊張してるよ。

「緒だね♡」

にこっと笑う包美は昔以上に魅力的だった。

でも、緊張していたのか…。

てつきり男として

見られてないのかと…。

「私、先入ってるね。」



ここで少し休憩して
息子を少し休めてから…

「あ。ここって確かタオル巻いて
入るのダメだったっけ。」

ん？まさか…



!!!!!!

タオルで覆われていた柔らかかな肌、
たぶんたぶんのおっぱい、薄いピンクの
少しとんがった乳首……

たぶん♡

今まで十年以上見えていなかった
彼女の秘部にとってもない興奮が
込み上げるのを感じた。



「少し太っちゃったんだ：
あんまり見ないでね？」

照れながら言い、浴場に行ってしまった
包美に愛しさを覚えてしまった。

なんとか興奮と息子を
抑えながら俺も浴場に向かった。




「はあ〜♡気持ちいい♡身体
動かした後のお風呂は最高だよね♡」

んんんんん


「そ、そうだなあ最高だあ。。。」「
最高だ：浮いてる濡れ濡れおっぱい…
はッ！まずい平常心平常心…。。。。
こんなことしてていいのだからか…。。」





包美は楽しそうだけど…
聞いてみるか…？

「な、なあ。もしかしたらこれって
普通じゃないんじゃないか？こういうのって
カップルがやることじゃ…。」



「え〜？昔から一緒に
入ってたじゃない。普通の
ことだよ。」

そ、そうなのか…。
で、でも俺も思春期な訳だし
もう少し危機感持っ…。

「ねえ…。」

「興奮……しってるんどころよ♡」

「!?!」

「実はね……私のおっぱいとか太ももとか
ずっと見てたの……全っ部気づいてたよ……♡」

バ、バレてた……!?



そり言うと包美は体を寄せ、
おっぱいを押し当て、

硬くなった乳首を
つつんと当ててきた。

「おちんちん…♡
触って欲しくてビクビク
してるよ…♡」

「おわさわしてあげようか…♡」



「そ、それは……」

乳首を唾液のついた
指先で弄び、耳元で
囁くように問いかける。

「あっ……誰が入って来たみたいだよ……♡」



「おっ……おっ……おっ……」

「だーめっ、ミニっし
影になってるから
見えないよ?」

「そ、そんなの屁理屈……」

「それにね。」

♡いっ♡

「隠れてやる方が
気持ちよくなれるよ…♡」

自分にだけ聞こえる
ように囁く。

そう言うと彼女はモノを指先で
スウー…ツとなぞり、熱い息を
漏らした。

ジロ♡
ジロ♡





「あっ…我慢汁…♡」

「糸…引いちちゃってるね…♡」

「私ゾクゾクして

きちゃった…♡」

「もっとなやへ…

っいんちや

おっかな…♡」

フェル



「おちんちん熱くなってきた……
あっ……我慢汁ぐぼれちゃう……♡」

「ぬるぬるだね……♡」

「おちんちん舐めたいな……」

「独り占めしたい……♡」

有無を言わずに
ちんこに顔を
近づける。

♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

「ずっとおっぱい見てたね。
サービスだよ♡」

汗とよだれの混ざったぬるぬるの
おっぱいで逃げられなくなる。

「いれでおちんちん
逃げられないね…♡」

おっぱい♡♡

おっぱい♡





「待っ…それやらばら…」

竿からおっぱいに伝うよだたの
感覚にさえ感じてしまっ。

裏筋を唾液たっぷりの舌先で下から
上にゆっ…くり舐る。

れん♡♡

たゆ♡♡

たゆ♡♡

たゆ♡♡

ちっっ

「んぅっ…♡すげー臭い…♡
らっぴらっぴゅっぴゅしたね…♡」

綺麗な顔が自分の種汁で
汚れる様に恍惚としてしまっ。

ぶっぴゅっ♡
らっぴゅっ♡
♡♡

下品に舌を出して顔を火照らせる

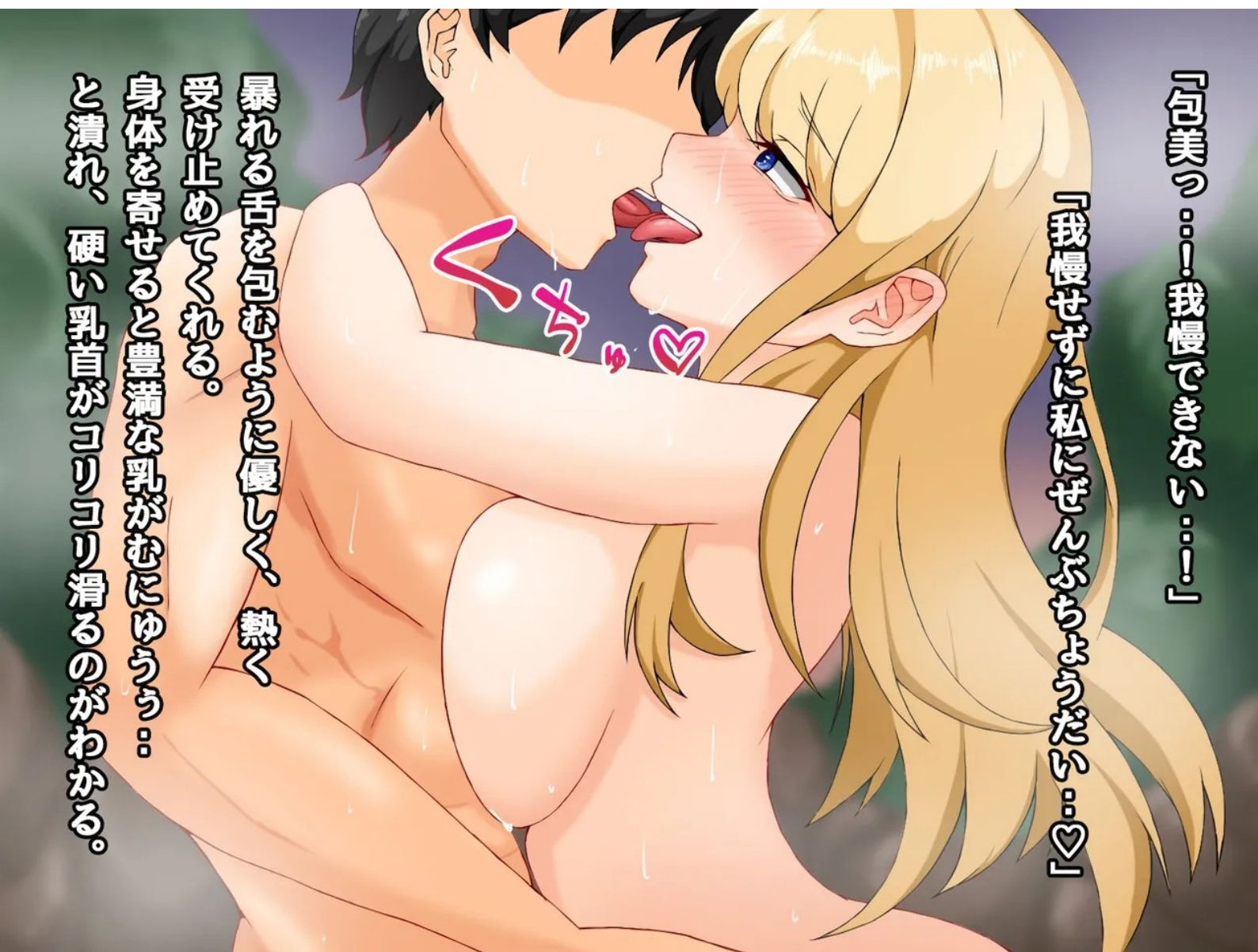
包美…今味わえているのは俺だけ…!!

「包美っ。。。我慢できない。。。！」

「我慢せずに私にぜんぶちようだい。。。♡」

暴れる舌を包むように優しく、熱く
受け止めてくれる。
身体を寄せると豊満な乳がむにゅうう。。。
と潰れ、硬い乳首がコリコリ滑るのがわかる。

くちゅ♡♡



「私ずっとごうしたかったの…」
「ずっと食べて欲しかった。」

おっぱいの押し付けが強くなる。
出したばかりの息子がまた脈打って
起き上がり始める。

「俺もごうしたかった。ずっと…」

おっぱい♡

ぬる

「れる…はツ…くちゅ…んあ♡」
乳首が重なり、互いを求めるようにど
コロコロ擦れ合う。

腰を激しくくねらせ、
徐々にキスが濃厚に、密に
なっていく。

セ
ン
シ
ブ

「フ
ッ」

「フ
ッ」

「私のこと…好きっ？」

「大好きだ。」

「うれひら…♡」

♡♡♡♡♡

「あ…♡♡♡♡♡舌吸っちゃ

やらあ…♡♡♡♡♡」

「嫌なの？」

「やめちやらめえ…♡」

もっど…もっどお…♡♡♡♡♡」

内に秘めていた感情が溢れる。

さっきの攻めが嘘みたいに子犬のように縋り付く。

「じゅき…すきら…♡♡♡」

全身をビクつかせながら言う言葉に
ギンギンになり、包美のもちもちの
股に擦り付ける。

「ソレ…ナカに…欲しい…♡」

「私…に…おちんちんで…」

じゅぽじゅぽって…シて…♡♡♡」

呂律と頭が回ってないとりんとした
言葉で必死にモノをねだる。

「んはッ……ゴム……ないよ……」
「いらない……ナマでほしい……」
「かんじたい……はやくぅ……♡♡♡♡」

とろろ♡♡

こんな包美初めて見た……
いつものお姉さんのような振る舞いが
嘘のようだ……。

脚を広げ、受け入れるように
愛液でめちやくちやになった
ワレメを開く。

とろんとした
笑顔で待つ
包美に吸い込まれ

ちやぶ

しゅん
しゅん
しゅん

興奮で反り返る肉棒を
あてがう。





包美の腰と膣が激しく痙攣する。

「イツ……んあツ……ツ♡♡♡♡」

びくん♡♡♡♡

「ハー……♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

快感



んんん

んんん

んんん
♡♡♡

んんん
♡♡♡

んんん
んんん





「はッ…♡まだげんき…♡
こんどはわたしが…♡♡♡」

お
じ
ゃ

「おちんちんが
ぽんだよ…♡♡♡」

ん
ん
ん

ん
ん
ん

肉のデコボコ二つ二つが
肉棒を撫で回す。

激しく弾む彼女の乳や尻、
ムチムチの肌から汗が
飛び散る。

腰のグラインドも激しくなり、
体液がこみ上げてきた。





「…私ね、今日のためにね…ッ」

「たくさん考えたの…ッ」

「どうやったら私のこと
異性としてッ…見てくれるかって…ッ」



「私、遊びじゃないよ…っ」

「もっといるんなあなただを
見てみたいのっ…お」
たほんっ

「…ほんとだ…」緒だらして…
くれる…っ？」

「当たり前だ…ずっと」緒だ…！」

たほんっ
あさっ

あさっ
あさっ

あさっ

「ありがと…っ♡」

「俺の気持ちだ…っ」

受け取ってくれ…っ！」

た伊んっ

た伊んっ

あま

あま

あま

た伊んっ

あま

「全裸で…っ♡♡♡」



「気持ちよかった？」

「最高だ……」

「また……シてくれる……」

「もちろんだよ。」

「えへっ……よかった♡」

安堵して笑みをこぼした包美は
自分の知っている包美の中で一番
愛おしかった。



「誰も…いないよな？今のうちに
身体流して出よう。」

「うん、そうしよっか。」

腕を組まれ、谷間に腕が
包み込まれた。

おっ

「ち、ちよつと。
当たってるんだけど…。」

「しらぶしよ？前より仲長へ
なった記念っ♡♡♡♡♡」

「あっ……。」

再び起き上がってしまった
息子を見て声を合わせる。

「……帰った……。」

「……お母さん……。」

もろもろの感情の中で
涙がこぼれ落ちる。

おわり





















































